

研究成果の概要

研究代表者：日本歯科大学新潟生命歯学部 衛生学講座 小松崎 明

提供を受けた「平成 25 年 国民生活基礎調査 匿名データ B」の分析結果については、下記のような概要を関連学会にて公表した。

研究成果：ストレス分類と症状認識、通院状況との関連性に関する研究

ストレス分類と症状認識・通院状況との関連性を明らかにし、ストレスの影響を検討するため、40～60 歳代の国民生活基礎調査の匿名データ 8,403 名（男性 4,045 名，女性 4,358 名）を活用し調査項目間の分割表分析（ χ^2 検定，Cochran-Armitage 検定），階層クラスター分析(変数分析)を実施した。その結果，高ストレス群は 1831 名 (21.8%)，低ストレス群は 6079 名 (72.3%)，未認識群 493 名 (5.9%) のように群分けできた。また，高ストレス群は女性中年群で 29.2%と多い傾向が認められた。高ストレス群では健康意識（主観的健康感）が不良との回答者の割合が高く，男女ともに有意差が認められた（ χ^2 検定： $p<0.01$ ）。

歯科系 3 症状（歯が痛い，歯ぐきの腫れ・出血，かみにくい）がある者の割合は，全性別・年齢区分で低ストレス群より高ストレス群で高く，両群間に有意差が認められた（ $p<0.01$ ）。歯の病気での通院者の割合は，女性で低ストレス群より高ストレス群で高く有意差が認められた（ $p<0.05$ ）。

症状名の回答率の順位では，高ストレス群では「眠れない」が 10 位以内に入っており，最も気になる症状名の順位では「歯が痛い」が含まれていた。

階層クラスター分析の結果では，樹状図上でストレス群と，健康意識や体がだるい等の項目が近接しており，ストレス群別とこれら項目に関する分析の必要性が示唆された。

【上記成果の公表先：日本歯科医療管理学会雑誌，第 54 巻第 4 号，p242～252，2020】